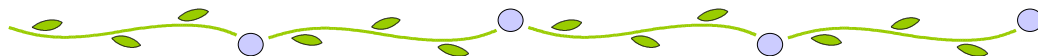


# 市川を調べる

編集 市川を調べる会(会長・星 一郎/事務局・木村隆一)

発行 八戸市立 市川公民館 (館長 <sup>け た</sup> 氣田 武男)



地 域

## 陸奥市川駅の歴史と現状

陸奥市川 鈴木 亮

### 1. 元は轟木信号所

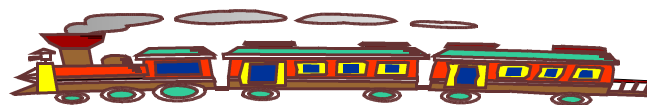
明治24年(1891)に東北本線が開通し、現・陸奥市川駅南側、旧・尻内駅と北側の下田駅との距離が約12kmもあり単線であったことから、列車交差場所として両駅のほぼ中間地点に轟木信号所が設置されました。(大正15年)

その後、日中戦争や第二次世界大戦の激化に伴い、軍の戦略上から市川村と下長苗代村にまたがる山林、原野一帯(現・自衛隊基地)を軍用地として旧陸軍省が買い上げ、航空基地隊を設置することになります。その軍用物資の搬入・兵員の輸送など緊急拠点として、昭和19年(1944)10月に轟木信号所が陸奥市川駅に昇格しました。

### 2. 戦後は米軍基地の町の駅

昭和20年の日本敗戦によって上記航空基地が米軍駐留の拠点になるに及び、駐留期間が敗戦処理にとどまらず、昭和25年に勃発した朝鮮戦争のとの関わりから長期化しました。昭和24年にはパラシュート部隊等も加わって駐留する米軍の数はおよそ3,000人とも言われました。

その結果、米軍基地の町としての桔梗野地区一帯が急膨張し、同地区の北部に位置する陸奥市川駅も重要視されるようになりました。基地内には駅からの専用線が敷設されると共に(日本軍の時代にはすでに引込み線があった一現在の松ヶ丘西側の道路)、駅には一等待合室・二等待合室を備え、駅舎から10mの所には蒸気機関車の窯を改造したボイラー室があり、そこには当時としては大変珍しいスチーム暖房がなされておりました。当時の職員数は100名以上であったと言われております。(最高でおよそ140名)



### 3. 現在は無人駅に

その後、米軍は三沢基地等に去りましたが、代わりに陸上自衛隊が駐屯するようになり、昭和30年代までは特別急行列車も数本停車するという賑わいのある駅でした。しかし、昭和40年代には車社会の到来等により、その後年々利用者数が減少したために民間請負駅に、そして、数年後にはついに無人駅になってしまいました。

現在、夏季は地元町内のボランティアによって何とか駅トイレは開放されていますが、冬季には水道が凍るとの理由で許可されず、トイレ閉鎖は社会問題になりつつあります。

最後に、陸奥市川駅の歴史の特徴について感じたことは、軍事駅として誕生したためか戦争が勃発すれば栄え、重要視され、平和になれば経費がかさむと見放され、粗末にされるという悲しい駅舎の運命です。このことを自分の目で60年間見てきて、今回それを文章にしました。

参考：陸奥市川町内会誌「あゆみ」

